古代の文房具

平川　南

中国では、文人が書斎（文房―房は「厨房」など、へやの意）で使用する文具（文房具）のうち、もっとも重要な4種―筆・墨・硯・紙―を「文房四宝」と呼ぶ。（図1）

筆

「筆」を「ふで」とよむのは、「文（ふみ）」＋「手（て）」による。また筆の異体字は「筆」と書くように、筆は竹の軸と動物の毛を束ねた穂先からなる。現在、使用されている太筆のほとんどは馬毛である。古代中国では兎の毛の筆が、漢代（紀元前202～後220年）以来、多く用いられた。古代日本においては、奈良・正倉院所蔵の文書などから、筆は兎・狸・鹿などの毛を使用されたことがわかる。兎毛は先が鋭く、強靭かつ弾力に富み、鹿毛は柔毛だがやや剛力性を持つ。これらの筆は奈良時代の国家的写経事業などの際に、その特質を生かして用途により使い分けていた。兎毛筆は経典の書写用、書写した経典の題名を表紙に書く場合は狸毛筆、やや剛い鹿毛筆は写経の料紙に界線（文字の行間などに引く罫線）を引くのに用いられた。正倉院宝庫には、古代の筆18本が現存し、詳細な調査が行われている。その筆の作り方は、まず穂先となる心毛を揃え、心毛の先を少し残して、これに麻紙（麻皮で作った紙）を、包帯を巻くように少しずつずらしながら数回巻く。その周りに毛を着せ、腰を麻糸で縛る。これを数回繰り返し、最後に上毛（化粧毛）で覆って麻糸で締めくくる。この穂先を竹製の筆管に挿し固定する。この筆と呼ばれる。（図2）この筆は、穂先をどのように濡らしても、腰までで下りることがなく、また腰までたっぷりと墨汁を含ませることもできないようである。したがって、謹厳にして端正な文字を書くための筆であり、今日私たちが日常使用している水筆とは構造的に異なっている。もちろん、古代にも一般的に文書用には水筆が使用されている。（図3）

筆の価格は、鹿毛筆が一管（筆の数え方は一管、二管…）一文、兎毛筆は一管四〇文と、同じ筆でありながら、兎毛筆の高価なことに驚く。

図1　古代の文房具〔茨城県立博物館『よみがえる古代の茨城』２００３年より

図2　正倉院伝来の筆（複製）〈雀頭筆〉

図3　正倉院文書にみえる「筆」と「墨」。光明皇太后の写経事業「兎（兎）毛筆一百八管」「墨七十廷（挺）」「鹿毛筆廿管」などと書かれている

【プロフィール】
山梨県立博物館館長・人間文化研究機構常勤理事
山梨県甲府市生まれ。宮城県多賀城跡調査研究所研究員、国立歴史民族博物館助教授、同教授、館長を経て現職。専門は日本古代史。
著書に『漆紙文書の研究』、『墨書土器の研究』、『古代地方木簡の研究』『全集日本の歴史 第2巻 日本の原像』、『出土文字に新しい古代史を求めて』、『律令国郡里制の実像』上巻・下巻、『歴博国際シンポジウム 古代日本と古代朝鮮の文字文化交流』など多数。

平成二十九年度編集担当ご挨拶

○多々ある仕事内容に、責任の重さと浅学の辛さを感じますが、五名のチームワークと事務局スタッフの協力をいただきながら、鋭意努めて参ります。役員、支部の先生方、会員の皆様のご教示、ご支援をお願い申し上げます。

水越　幽峰

○前回初めての編集で、学生版の小学部を担当しましたが、自分の勉強不足を痛感しました。今回は中学部と一般部を担当します。皆様の御支援、御指導を頂き、自からを高める様な編集を目指したいと思いますので、ご教示お願い致します。

中村　一誠

○初めて、編集に携わることになりました。よろしくお願いします。主に、一般誌を担当します。編集長や他の編集委員、事務局の方のサポートをいただき、読者の書の世界が広がるように進めたいと思います。

大久保樹心

○「かな」担当として初めての編集の仕事をさせていただきます。編集長を中心にチームワークを大切に取り組む所存でございます。諸先生、会員の皆様、事務局の方々、どうぞご教示、ご支援の程お願い申し上げます。

大野　幸子

○今年度、学生版小学部を担当させて頂きます。前年度同様、小学校の「書写」と違いを生まないよう作業を進めたいと考えております。諸先生、会員の皆様、事務局の皆様のご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

嶋口　一葉

平成二十九年三月

全日本書芸文化院

平成二十九年度編集担当

水越　幽峰
中村　一誠
大久保樹心
大野　幸子
嶋口　一葉

編集後記

○表紙は「那須國造碑」です。この碑の建立は七〇〇年頃、書体は六朝風の楷書です。一六七六年に発見されました。

○表紙Ⅱは平川　南先生（山梨県立博物館館長、人間文化研究機構常勤理事）に「古代の文房具」と題して、十一ヶ月連載していただきます。

○学書の友は、昭和六十三年度の全書芸誌文中から先達の、「私の創作を語る」と略歴を掲載しました。手元にない会員も多いのではないかと思います。学書に生かしてください。

○昇段級試験の課題が発表になりました。年に一度のチャンスです。早目に対策を練り準備をしましょう。昨年の全書芸誌十月号に昇段級試験の注意事項が詳細に記されていますので、参考にすると良いでしょう。（幽峰）

平成二十九年三月十日　印刷
平成二十九年三月十五日　発行

九〇〇円

代　表　大　倉　谷　山
編集者　水越幽峰・中村一誠
　　大久保樹心・大野幸子
　　嶋口一葉
発行者　岩　本　宗
印　刷　株式会社　カワイ

全日本書芸文化院
東京都千代田区神田錦町一ノ十ノ一
振　替　〇〇一五〇―七―一三五一
電　話　〇三（三二九四）三五五一
ＦＡＸ　〇三（三二九一）一三一八
http://www.zshogei.co.jp

※郵便は〒101－8715 神田局私書箱37号へ　宅配便は〒101－0054 千代田区神田錦町1－10－1　サクラビル1Ｆへご送付お願い致します。